

# 「古書」逍遙

## 丸尾壽郎

中島敦に「名人伝」という作品がある。

趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうとして、当代の名手飛衛のもとに入門して秘術をきわめる。ついで、霍山の頂きに棲む老師甘蠅のもとで不射の射という神技を修得する。これは見えざる矢を無形の弓につがえて放ち、獲物を射落とす究極の技である。九年の修業ののち山を下りた紀昌は、表情のない木偶のごとく、愚者のごとき容貌になっていた。「至為は為すなく至言は言を去り、至射は射ることなし」と絶えて弓を執らず、四十年ののちに煙のごとく世を去った。その晩年は、枯淡虚静の境に入り、呼吸の有無さえ疑われるほどで「我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳の

如く、鼻は口の如くに思われる」情態であったという。

ここで中島敦は「この老名人に棹尾の大活躍をさせて、名人の名人たるの所以を明らかにしたいのは山々ながら、一方、また、何としても古書に記された事実を曲げる訳には行かぬ」と記している。

古書に記された事実とは、『列子』湯問篇十四の紀昌・飛衛の寓話と、黄帝篇五の伯昏瞿人の不射の射の寓話で、弓矢を捨てた晩年の心境は黄帝篇三、四に見られる記述を指す。中島敦は、これらを巧みに構築して、紀昌を『列子』のいう「道」の体現者として描き出したのである。

弓矢の道をきわめた紀昌が老いて知人の宅

で見覚えのある器具を見たが、名も用途も思ひあたらぬ。そこでその家の主人に何と呼ぶ品物で何に用いるのかを問うた。はじめは冗談かと思っていたが、まじめな顔つきで三度び問うに及んで、主人はほとんど恐怖に近い狼狽をしめして「あゝ、夫子が、古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや？ あゝ、弓という名も、使い途も！」と吃りながら叫んだという話でこの作を結んでいるのは、「道」の思想を解説してみせたものである。

この心境は『列子』では中年にして「忘」の病に罹った宋の陽里の華子という男の寓話で明らかになる。儒者の一家相伝の秘訣で健忘症が治った華子は、私が病氣であった時、

「心はゆつたりしてこせつかず、天地があるのかないのかすらも意識しなかった。」いま俄かに過去数十年来の生死・損得の認識、哀楽・好悪の感情が一時によみがえってきて、「ほんの一時でも、もとのように万事を忘れるということが二度とできなくなってしまった」と嘆く。これが『列子』の清虚無為の世界であるが、こむずかしい理窟はさておいて、これは外観的には「ほうけ」の姿に似てはいないだろうか。

有吉佐和子の『恍惚の人』は、老耄の痴呆の親の常軌を逸した言動や理解不能の行為とながら茂造の心や思いは描かれてはいない。徘徊にしても、どんな思いで歩き回っているのか、厠のあさがおをどうして外そうとしたのか、茂造は胸のうちを明かさなから、推察以外に当人の心裡そのものは描きようがない。いきおい外在描写にならざるを得ないが、茂造もあるいは華子と同様に、風に吹かれる木の葉のように自然に化して振舞っているのかもしれない。

昭子はそんな茂造を「夢を見るような眼つき」で「自分を忘れてる」のではないか。「焦点は遙か彼方にあるような遠い眼」をし

ていて、「それは恍惚として夢を見ているように思われた」と述べている。また突如として微笑するのは嬰兒の「無心の笑顔」に似て「生きながら神になるってこれかしら」と思ったり、「不平も不満もないんだわ。仙人みたい。人間の理想の姿じゃないかしら」と思ったりする。その「天衣無縫」の情態から夫の信利は「人間は人間を無限に超越する」というパスカルの名言を思い起こしたりしている。なんと紀昌・華子の心境に近いことか。

作中ただ一度しか使われていない「恍惚」という語は、老子が純粹無雑の状態を宇宙の本体になぞらえ、これを仮りに「道（宇宙の本体）」の概念としたものとされるが、有吉佐和子は、とらえきれない痴呆老人の心の内面のありようをこの語でとらえ、痴呆の状態を本体回帰の相として深い理解をしめしたのであった。

「恍惚」の語は、それまで広辞苑にも「物事に心を奪われて、うっとりとするさま。ぼんやりしてはつきりしないさま」の漢語の二義の記載しかなかった。それが「恍惚の人」がベストセラーとなった一九七二年以来、どの国語辞書も「年取ってぼけるさま」の語義を加えるようになった。単なる流行語ではなく、

老人・老後問題、社会福祉政策を考える際の  
枢要の語として国語に定着したのである。

無といひ虚といひ、言語や認識あるいは時

空をも超越した老・荘・列の道家思想は容易に理解をゆるさないが、『列子』には中島敦が援用している以外に、現代の科学技術や医療技術を彷彿とさせるような話もある。僂師という技術者が周の穆王に献じた精巧な機械人形は、身のこなしも歩きぶりも唄も舞いも人間そっくりで、王の寵妃に秋波を送ったりする。人体のすべてを部品化し、その組合せで人形を造ろうとするクローンのな技術志向は現代の人型ロボットの終極を思わせる。

公扈と斉嬰の心臓を交換する名医扁鵲の話は、いうまでもなく臓器の生体移植である。心臓の交換移植手術を終えた公扈は斉嬰の妻が待つ家に、斉嬰は公扈の妻が待つ家に帰るのだが、もとの心臓の持主の家へ帰るといのが諸誰でないならば、それは現代の臓器移植にかかわる生命科学の倫理的不安感の象徴とも受けとれるが、『列子』はこんな話も少くとも紀元三百年ごろまでに記しているのだ。

注・列子の記述は、岩波文庫、小林勝人訳

注『列子』上・下を参照した。